

〔曲名〕 本朝昔噺絵本

1.狐の嫁入り

2.因幡の白兔

3.舌切雀

4.こぶとり

5.花咲爺

〔曲種〕

〔作曲者〕 Jiro Nakano

中野二郎

〔編曲〕

童画家、版画家の権威として知られる武井武雄が、昭和十年五月に「十二支絵本」という書名の小型本を、

新宿三越における玩具小工芸品展覧会賛助出品として頒布された。

これを第一冊として爾来四十数年の間、毎冊が素晴らしい美術工芸品とも言い得る本が刊行され、今日(1979)既に110冊を超えている。

これらは凡て印刷様式に、用紙に、或は装本に多種多様の表現形式をとっているのが特徴である。

この私刊本第七冊目は本朝昔噺と題して昭和十六年に刊行された。

内容は日本人なれば誰でも知っている桃太郎、かちかち山、一寸法師、舌切雀、猿蟹合戦、文福茶釜、金太郎、

かぐや姫、因幡の白兔、こぶとり、浦島太郎、花咲爺、を童画で綴ったもので、和紙に黄土、岱緒、藍、黒、

の渋い四色を使って、捺染で仕上げたまたとない趣味深い絵本である。

これらの昔噺から採られた十二の情景はどれ一つ見ても直ちに曲になりそうな魅力に満ちたもので、私の還暦記念演奏会の機に作ってみたものである。

## 一、狐の嫁入(表紙絵)

日が照っているのに小雨がパラパラと降るのを(日照雨)狐の嫁入と云った。

或は夜、山野で狐火が連なっているのを、狐の嫁入りする行列の提灯と見て云ったものとも云う。

現在私の住んでいる城山町の家の際隈は、今こそ軒並に家が建っているが五十年ほど前は一面の藪で、大きな杉の木があり、

夜通りかかると啄木鳥(きつつき)が桐穴の中でコツコツやっついていて恐ろしかったと云う。

貉(むじな)や狸や狐がいて、覚王山の尾崎邸に往みついている尾の先の白い狐には尾崎白左衛門と云う名前まで貰っている狐が居たと云う。

代々畳屋をしているこの辺りの古老の話では、『四ツ谷(現在名古屋大学)にはよく化かす狐がおりましてなも、

私のつれ(友)がその辺歩いとりますと向うの方で坊主が大勢で何事か話合つとるので気味悪う思いましてほかの道廻って参りますと、

又一人ヒョッコリ一人の坊主に逢いましてなも、そしたらその坊主が「ひよつとあなたはどこかで坊主を見かけなんだか」と尋ねますので

「さっきあちらの道で何か話合つとった」と申しましたら

「それではその坊主はこんな顔してしいなかったか」と云うその顔の物凄さに震え上って一目散に逃げましたそうで。

昼間化かすことも御座いますが之は見とった方が面白う御座います。

同じ道を往ったり来たりしとるうちに、俄に裾をからげてはだし跣(はだし)になるので

「どうしたのだ」と訊(たず)ねますと「俄雨で道中困つとります」と着物を搾(たず)ったりしましてなも。

フフフ、私んとこの婆さんは狐の嫁入りも見ましたがなも』

「で、やっぱり人間の姿をしているんかね」

「へえ。」

「それなら本物の人間の嫁入りを見間違えたんだらう」

「いえ、道のない所を行列が参りますから狐に決つとります」と微塵も疑う様子がない。

「狐火も昔はよう見ましたがあれは陰気でなも。初めひとかたまりの火が向うの方に見えとりますと

それが急にパツと七ツ八ツに分かれたと思うと急に消えて、五六丁離れた方向にパツと見えたりしまし

て、ふんとうまいことやります。」

## 二、因幡の白兔

隠岐国から因幡の国へ渡るため、鰐鮫を欺いて海上に並んだその背を渡った白兔が、最後の鰐鮫に奸（かん）計を見破られて皮をはがれる。

大国主命の兄八十神(やそがみ)の教えで潮を浴び、一層苦しむが大国主命に救われる。

明治38年に刊行された尋常小学唱歌には石原和三郎作詞田村虎蔵作曲で大こくさまの歌はよく馴染まれている。

大きな袋を 肩にかけ  
大黒様が 来かかると  
ここに因幡の 白兔  
皮をむかれて 赤はだか。  
大黒様は あわれがり  
きれいな水に 身を洗い  
蒲の穂綿に くるまれと  
よくよく 教えて やりました。  
大黒様の 云うとおり  
きれいな水に 身を洗い  
蒲の穂綿に くるまれば  
兔はものと 白兔。

## 三、舌切雀

明治十三年宮田幸助発行竹内栄久画のお伽赤本舌切雀には次の様な物語が綴ってある。

昔々ある所に正直なる爺あり、その隣によく深き婆あり、或る時慾深き婆、糊をおきけるところ、

爺飼いおきける雀が糊を舐めければ 婆は腹たちにて 雀の舌を切り 逃がしやり 爺は山より帰

り見れば雀が居ざるゆえ隣の慾深さ婆に訊ぬければ糊を舐めたゆえ舌を切り逃がしやりしとききて爺は  
雀のありかを探しける

ようよう雀に出逢いければ 爺も喜び雀も喜び 雀集まり 藪の家へ案内をし 爺さまの親切ありがたく思い  
色々とりなし 酒肴 馳走なし 雀踊りなぞしてとりもちける。その夜泊り 翌くる日 帰らんとするに  
雀わかれを惜しみ お爺さんに重い葛籠（つづら）を進ぜましようと言えければ

私は年寄りゆえ軽いのを貰いましようと言えつづらを背負い帰り つづらをあけて見れば 金銀 色々なる宝  
物数多出でるを

隣の慾深き婆ア見つけて直ぐさま 雀のありかを探しければ ようよう探し当て 雀見るより憎しと思ひ 婆  
さま つづらを進ぜましようと言え

云うより早く 重いつづらを下さいましと腰の立たぬをようようと背負い帰り、かのつづらを我が家へ入  
れて早くあけて見るにぞ

こわいかに あまたの化けもの現われ 婆を苦しめ 悩ませける。正直爺ますますよきこと重なり いんきよ  
となりければ

必ず悪しきことはせぬものなり今は婆も 心改め 善人となりけるにぞ。めでたしめでたし。

#### 四、こぶとり

昔々頼にたんこぶのある爺があつたんじゃ。

ある日山へ行くと夕立が来てな、岩の木の虚の中へ入って雨やどりするうち、眠気がさいてきて、ぐう  
すけ裏てしまったんな。

そいでふっと目を覚いたら、どっか遠いところから 笛や鉦の音がせるな、ちんちんかんかん どんどん、  
奇態な恐ろしい顔をした鬼どもばかり一ぱいになって踊つとる。

爺は踊りが好きでな 初は恐ろしいやつが来たと思って震って見とったけど、あんまり面白そうに踊り狂  
うやつで、

さっぱり我を忘れてまって、おれもそいつでやってみるって、飛んでっただけなが。そこで踊って踊って  
踊りからかいたげなが、

鬼と人間の距てもあつたもんじゃない。

鬼の方もまた変ったやつが来た 角も虎の皮の禪もないやつが来た面白がり、それで夜の明けるまで踊り狂って、鬼たちは明日の晩も来い。

大変面白かったでおらんたもまた来るでどうでも来いよ。

爺は、へい来ます、と云ったがよう見りゃ顔は赤いやら青いやら角はあるし

こりゃ気に入っているうちはいいけど、もう気に入らな取って喰われるやら、引き裂かれるやら。

恐ろしくなって、しどろもどろの返事をしおったら、鬼の大將の云うことにゃ、きつと来るな、約束じゃぞ、

そやけど人間と云うやつはどうも信用できんが、何か証拠に、明日の晩来れば返すで、置いてけ。

爺は 何も今日は置いてくものは持っとりません。

すると鬼はそうか お前の一番大事なものは何じゃ、と云うんで 爺は頬のたんこぶを撫でるつもりでなしに撫でておったら、

鬼はあゝそうか ふうん、これが一番大事なんか そんならそのたんこぶはこっちへ預っとう。

手をかけたと思ったら、ばりって取ってまったって。

そしたらもう、つるつるになってしまつてな、爺がわしの一番大事なものじゃか、って云うと、鬼は明日の晩来れば間違のう返すでって、

ほうかそりゃまあどうか明日の晩までお願いします。って帰ってしまったと。

そして明日の晩行くどころか、あんな恐ろしい所へもう行くもんか、また行きゃ元の通り、昨夜のこぶは返しますって返されりゃ、

あほらしいって、爺はもうその山へ行かっせなんだけな。

## 五、花咲爺

昔々ある田舎に正直なる爺あり 日頃犬を飼いおき 我が子の如くに可愛がりたるところ、或る日かの犬爺の袖をくわえひく故、

爺も何するかと思ひ一緒に参りけり、犬暫し立ちどまり しきりに地を掘るにぞ 爺も何心なくその所を掘りければ 色々の宝ものを掘り出しける。

その隣に慾深き爺あり 之を見て羨しがり かの犬を借りに来たり引きつれ行くに かの犬転びけるを見てそ

の所を掘りければ

色々の汚さもの 犬の糞など沢山に出でければ 慾張り爺 殊の外怒り かの犬を打ち殺しける 正直爺 これを  
きゝて嘆き悲しみ葬りける

その夜 夢枕に犬参り申しけるは我を埋めたるそばにある 松の木にて臼を作り餅を搗（つ）くべしと云い  
ける故

翌日 その木にて臼を拵（こしら）え餅を搗きければ 臼の中より小判沢山出でけり これをかの慾深爺見て  
又臼を借りに参り餅を搗きければ

かの臼の中より汚なきものが沢山に出でければ 又々怒り かの臼を打ちこわし 囲炉裏の中へくべ焚きつく  
しけり。

正直爺は臼をとりに参りければ 臼はこわして焚いて了つたと云いければ 嘆き悲しみて その灰なりと少  
しばかり貰いたいと

その灰を持ち帰りけり それよりその灰を箆（ざる）に入れ 枯木に登りいたりければ

そのところの殿様お通りにてわれは何者なるとお訊ねに 私は枯木に花を咲かせる爺で御座いますと申し  
ければ

一つ咲かして見せろと仰せければ爺は灰を枯木へまきければ枯木に花が一面に咲きける

殿様大喜びにて色々の宝もの 御褒美沢山に頂き帰りける 慾深爺これをききつけ又々灰を持ち 枯木に登り  
いたる所へ 殿様お通りにて

われは何者なるぞと 訊ねければ 枯木に花咲爺と申しければ 花を咲かせて見せろとの仰せ 爺は 灰をまけ  
ども咲かず

ついに殿様の眼に灰が入りけるゆえ 御立腹にてお供の衆に散々に打たれようよう詫びをいたし逃げ帰り  
けり あしき心出すべからず

正直爺は殿様へお呼び出しになり 御扶持を頂きしとぞめでたしめでたし。

マンドリン古典合奏曲集26集より